

# 十五世紀イングランドのキャロル写本

## MS. Eng. poet. e.1に関する史料論的分析

上野 未央

はじめに

本稿は、英詩の一種であるキャロルを収めた写本、オックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵MS. English poetry e.1（以後本稿ではe.1写本と略記<sup>(1)</sup>）を史料学的に分析し、十五世紀に作成された類似の写本群の中における位置を再検討することを目的とする<sup>(2)</sup>。

e.1写本は主に英語で書かれた七六の詩・キャロルからなる十五世紀後半の写本で、十九世紀から二十世紀前半にかけて「ミンストレル (minstrel) 写本」と呼称されていた。イングランド中世のミンストレル<sup>(3)</sup>（吟遊詩人・芸人）によって歌われたキャロルが記録された写本であると考えられたためである。しかし、その後ミンストレルとの関わりが疑問視された結果、現在e.1写本は「キャロル写本」、「キャロル集」、「ソング・ブック」などと呼ばれている。

たとえば、J・ボフィーとJ・トンプソンは、十五世紀の写本文化における「一つの注目すべき革新は、詩集 (purely poetical collections) の登場である」と述べ、チョーサーやリドゲイトなどの作品を収めた写本群の登場を例に挙げた<sup>(4)</sup>。そして、このような写本群において、e.1写本を、「実用的な」性格を持つキャロル集であると位置付けた。e.1写本に

1 十五世紀イングランドのキャロル写本MS. Eng. poet. e.1に関する史料論的分析

はほとんど挿絵がなく、三篇のキャロル・詩には楽譜が付いていることから、歌い手が、見て歌うための写本であったと考えられたからである。<sup>(5)</sup>

しかしながら、<sup>(6)</sup>「写本に関しては、写本の作成過程や、写本作成者の意図は、ほとんど考察されないまま、収められた個々の詩・キャロルを、文学的に扱う研究が大部分を占めてきており、史料批判は十分になされてきたとは言いがたい。したがって本稿では、<sup>(7)</sup>「写本に収められたキャロル・テキストを歴史学の史料として用いるための前提として、当該写本の史料学的特徴・内容構成を検討した上で、十五世紀の類似の写本群との比較を行う。このような史料批判を行うことによつて初めて、当該写本の作成者や作成意図について推定することが可能になり、それがテキスト分析の前提となると考えるためである。

本稿は三章からなる。まず、本論に入る前に、当該写本を形成した要素である、キャロルについて説明する必要があるだろう。そのため、第一章では、十五世紀イングランドにおけるキャロルについて、主に英文学研究の成果をもとに、歌い手、歌われた場、キャロルが収められた写本群について概観する。続く第二章において、まず、<sup>(8)</sup>「写本の史料としての体裁、来歴に関する先行研究を整理、その上で、改めて当該写本の内容構成を分析、当該写本の作成過程について考察を加える。そして、第三章において、<sup>(9)</sup>「写本に収められたキャロルと同じキャロルを複数収めた同時代の四写本との比較を行う。以上の比較分析を通して、当該写本の作成者・作成意図に関わる特徴を明確化したい。

## 第一章 十五世紀イングランドにおけるキャロル

### 第一節 キャロルとは何か

キャロル carol は、古フランス語 carole から派生した語であると言われる。古フランス語 carole は、輪になって踊る「リング・ダンス」を意味する語であった。<sup>(6)</sup> 英語キャロルは、十四世紀以降、英語による文学作品に登場するようになり、たとえばチヨースーの作品中では、歌や踊りと組み合わせられて「キャロル」という言葉が登場する。<sup>(7)</sup> 十五世紀になると、キャロルは必ずしも踊りとは組み合わせられず、「歌」として史料に登場するようになる。<sup>(8)</sup> たとえば、十五世紀前半の写本に残るキャロルには、「あなたに願う、多かれ少なかれ／このキャロルを、クリスマスに歌ってほしい」というフレーズがある。ここで、キャロルは単に「歌」を意味する言葉になっている。<sup>(9)</sup>

中世のキャロルについての代表的著作は、英文学者 R・L・グリーンンの *The Early English Carols* である。<sup>(10)</sup> この研究でグリーンンは、十四〜十六世紀の約百の写本群に収められた、およそ四七〇篇の英語キャロルに詳細な注を付した。それらキャロルを収めた写本群の大半が十五世紀に作成された写本であるため、文学史上では、十五世紀における英詩の発展の一要素として、キャロルの登場が挙げられることが多い。<sup>(11)</sup>

現在では一般に、中世のキャロルとは、押韻を踏む複数の節からなる英詩の一種であると言われる。また、キャロルの特徴としては、第一節が始まる前に、一〜三行からなるバーデン (burden) があり、これが各節の終わりでも繰り返されることが多いことがしばしば指摘される。たとえば『写本』には、次のようなキャロルがある。

「バーデン」救いたまえ、王妃よ／いつくしみ深き母よ

「二」 ああ清き乙女、慈悲ぶかい人よ／全ての人間にとってあなたは慰め／あらゆる所で、天后である。／救いたまえ

「二」 我らの安らぎのため、あなたは子を生んだ／それでも罪に落ちなかった／マリア、母よ、柔和で優美な。／救いたまえ<sup>(12)</sup>

このキャロルでは、最後の第六節まで、「救いたまえ」というバーデンの冒頭のフレーズが節の終わりに繰り返される。<sup>(13)</sup>

これが、典型的なキャロルの形式である。また、キャロルの主題としては、右の例のように、キリスト教に関することが最も多く取り上げられた。しかし、恋愛、女性風刺、社会風刺、飲酒の楽しみなどもキャロルには歌われた。<sup>①</sup>「写本にも、女性風刺、飲酒の楽しみを述べる歌などが、先に挙げたマリア崇敬のキャロルとともに収められている。例えば、<sup>②</sup>「写本には、夫婦の争いを、次のように描くキャロルがある。

「バーデン」へイ、ホー。おろかな人々よ。神はあなた方を助けてくれる

「一」ある日、争いが起こった／年取った男と、彼の妻の間で／彼女は彼の髭をつかんだ、大変ひどく／へイ、ホー

「二」彼女は大変すばやく髭をつかんだ／そのために彼の両方の目から涙があふれ出た／へイ、ホー

「三」戸口から、彼は出て行った／彼は近所の人々に出会った／お隣さん、なぜ泣いているの／へイ、ホー

「四」私の家には煙が満ちている／中に入ってごらん、あなたも泣くだろう／へイ、ホー<sup>(14)</sup>

このように、世俗の事柄を題材にしたキャロルも<sup>③</sup>「写本には収められている。つまり、キャロルは、何が歌われたかという内容からは定義されえず、バーデンを持ち、押韻を踏む節から構成されるという形式から、定義されうるものである。

さて、歴史学においては、キャロルのテキストから、中世後期イングランドにおける世俗の人々の心性を解明する試みがなされてきた。たとえば、E・ダフィーは、イングランド宗教改革前夜における世俗の人々の宗教心性を見る一例として、英語キャロルを取り上げ、キャロルに、賛歌から引用したラテン語のフレーズが頻出することを指摘し、教会における典礼の一部が、俗人に親しまれていたことを示すと解釈した。<sup>(15)</sup>ここでは、キャロルが、世俗の人々に親しまれていたことが、暗黙の前提となっている。しかし、キャロルというものが、実際にどのようなように用いられていたのかという点については、十分な考察がなされてきたとは言いがたい。したがって、本稿ではまず、キャロルというものが、中世後期イングランドにおいてどのような場で、どのような人々によって歌われていたのかということを見ていきたい。

## 第二節 キャロルの歌い手・歌われた場

中世後期イングランドにおけるキャロルの歌い手としては、主に、ミンストレルと聖職者が挙げられてきた。まず、ミンストレルがキャロルを歌っていた様子は、十五世紀のロマンスに描かれた、クリスマス・イブの宴の描写に、以下のように出てくる。

ためいきをつきながら、彼は聴いた／様々なミンストレルたちが、奏でる音を／トランペット、バグパイプ、そしてクラリオン／ハープ、リュート、そしてシタール(cithern)／そのほかの弦楽器<sup>(16)</sup>／多くのキャロル、すばらしいダンス／あらゆる場面で、歌を聴いた／全ての場所で。本当に<sup>(17)</sup>。

ここで、キャロルは、ミンストレルの芸の一種として挙げられている。また、十六世紀の例であるが、ウスター大聖堂付属修道院が、毎年ウスター市の役人たちのために開いていたクリスマス宴会の会計記録に、一五二七年、「キャロルを歌うこと(に對して)。そしてミンストレルに<sup>(18)</sup>」として、それぞれ二シリング六ペンスと十六ペンスが支払われたことが記された<sup>(19)</sup>。同会計記録からは、六月に行われた宴においても、キャロルの歌い手に支払いが行われたことが判明している。

キャロルそのものにも、歌われた様子が描かれている。一五〇〇年頃に作成された写本に残るキャロルには「ここに人皆が、それぞれのマナーでキャロルを歌う／彼が歌わなかったら、彼を追い出そう／だから我々はいつも、楽しい<sup>(20)</sup>」というフレーズがある。以上の例からは、キャロルというものが、人々の集う場、主に祝宴において歌われるもので、歌い手は、時にはミンストレルと同類の世俗の歌い手であり、また時には宴に参加した人々であったことが分かる。

一方、聖職者によってキャロルが歌われたこともあったと考えられてきている。現存するキャロル写本の譲渡が行われる前の所有者、すなわち原所有者が聖職者であったことが多いためである。たとえば、初期の英語キャロルを収めた、十

四世紀後半の写本 National Library of Scotland, MS. Advocates 18. 7. 21 は、グリムストーン<sup>(1)</sup>のジョン (John de Grimestone) というフランシスコ会修道士によって作成・所有されていたと言われている。この写本には、ラテン語による説教の覚書きがキャロルとともに収められており、キャロルは説教の合間に用いられたと推測されてきた。この写本では、キャロルは、それぞれの冒頭に付された、教会の祝日のアルファベット順に収められ、写本の使用者にとって使用しやすいように編集されたようである。

十五世紀末、フランシスコ会修道士ジェイムズ・ライマン (James Ryman) により作成され、所有されていたとされる写本、ケンブリッジ大学図書館 MS. Ee. 1. 12 にも、賛歌の英訳とともにキャロルが収められている。この写本に収められたキャロル群も前述の写本と同様、説教で用いられたと考えられてきた。<sup>(22)</sup>しかし、説教の中で、実際に、どのようなキャロルが歌われたのかは、明らかではない。

教会によってキャロル本が購入されたこともあった。十六世紀の記録であるが、ロンドンの聖マリア教会の会計簿に、一五五三年に五冊の「キャロル本 (carol book)」を購入したことが記されている。<sup>(23)</sup>

また、英文学者 R・H・ロビンスは、キャロルが、教会における行列用賛歌 (processional hymn) として歌われたと推測した。その根拠は、英語によるキャロルに、ラテン語の行列用賛歌から借用したフレーズが見られることにある。ロビンスは、賛歌とキャロルとの形式の類似も指摘している。<sup>(24)</sup>しかし、グリーンは、キャロルが行列用賛歌として使われたという記録は残っていないと指摘し、ロビンスの説に反論した。議論は決着をみていない。<sup>(25)</sup>

一方、キャロル写本が、聖職者の手から俗人の手へと渡った例も確認される。オックスフォード大学ボードリアン図書館 MS. Douce302 は、ジョン・オードリー (John Audelay) という、アウグスチノ会修道院の礼拝堂付き司祭の作ったキャロルを収めた十五世紀前半の写本である。この写本には、所有者としてワイアット (Wyatt) というミンストレルの名が記されている。<sup>(26)</sup>この写本は、ミンストレルの名が記された唯一の写本であるとともに、聖職者からミンストレルへと

所有者が変遷したことを示す例となっている。つまり、中世のキャロル写本の原所有者・書記は、聖職者であった場合が多いが、キャロル写本の中には、世俗の手に渡るものもあったと考えられる。<sup>(27)</sup>

十六世紀になると、キャロル写本の原所有者として、俗人が登場する。十六世紀初頭のロンドン商人リチャード・ヒルのコモンプレイス・ブック（オックスフォード大学ベイリオル・カレッジMS. 354）が、その一例である。<sup>(28)</sup> また同じ時期、印刷本として登場したクリスマス・キャロル集も、世俗の人々の手に渡ったと推察される。<sup>(29)</sup>

以上をまとめると、先行研究では、キャロルは主として、キリスト教の祝日に関連した祝宴、あるいは説教に関連した場で、歌われるものであったと推察されてきた。また、中世後期イングランドにおいて、キャロルは、世俗の歌い手によっても、聖職者によっても歌われていたようである。つまり、キャロルは、歌い手も聴衆も特に限定しないものであったと考えられる。しかし、キャロル写本群の原所有者には聖職者が多いことから、現存する十六世紀以前のキャロル・テキストの大部分は、聖職者の手によって作成あるいは書写されたものであったと推察される。

さらに、キャロルは、十五世紀においては、チヨールサーヤリドゲイトなどの作品群、賛歌や説教、奇跡物語などと一緒に写本に収められることが多かったという事実がある。十六世紀になると、先述のリチャード・ヒルのコモンプレイス・ブックには、キャロルが分類されて収められ、クリスマス・キャロル集が印刷出版された。十六世紀にはこのように、キャロル収集が意識して行われたようであるが、十五世紀の段階で、キャロルは他の文学作品などと混在した形で写本に収められたことが多かった。その中で、『写本は、英語キャロルとそれに類似する短い詩のみからなるという点で、写本全体をキャロル分析に用いることが可能な、貴重な史料であると考えられる。

ここまで、十五〜十六世紀におけるキャロルの歌われた状況を、同時代の史料や、キャロル写本群の所有者から推察した。次章からは、キャロルを集めた写本、『写本に対象を限定し、史料の体裁・内容構成を分析していきたい。

## 第二章 e.L写本について

### 第一節 史料の体裁の分析

e.L写本は、紙の写本、頁の大きさは約一二二ミリ×一五九ミリであり、十九世紀に製本された本の形態で遺されている。<sup>(30)</sup>所有者・書記を示す情報は記されていない。内容は、キャロルとその他の詩の七二篇が、英語またはラテン語交じりの英語で書かれており、ラテン語のみの詩は四篇である。フォリオには頁番号が一から六四まで入っているが、これは十五世紀以降に書き加えられたものと言われる。<sup>(31)</sup>ほとんどのキャロル・詩に、節の一行目と最終行を結ぶ線、または脚韻を結ぶ線が、節の右手の余白に、黒で引かれている。節・韻を明示するためであろう。その線のさらに右の余白には、多くの場合、リフライン部分が書かれた。<sup>(32)</sup>f.13v.には、余白を埋めるかのように、直線のみで描かれた四角い迷路のような図が黒一色で描かれた。また、f.40v. 41v. 50v.には楽譜が書かれている。<sup>(33)</sup>さらに、二篇のキャロルには、どのようなメロディーで歌うかという覚え書きが付されている。<sup>(34)</sup>

書記については、ボードリアン図書館所蔵の写本カタログで、三人以上の手による<sup>(35)</sup>とされたが、後に、グリーンと、ミンストレルが関わったとされた写本群を分析したA・テイラーは、この写本が二人の書記（仮にA・Bと記す）により作成されたと判断した。それは、書記Aはf.11r.~f.50r.、書記Bはf.50v.~f.61r.を書いた上で、f.34v.・f.41v.・f.42r.を部分的に書いたというものである。<sup>(36)</sup>書記Bはf.34v.・f.41v.・f.42r.の一部を書き加えたと考えられる。

フォリオの作成年代はf.11~f.62が、十五世紀である。f.13~14、f.19~20、f.25~26、f.30~31、f.37~38の間には、折丁を作る際に紙を綴じ合わせた糸が確認できる。したがって、テイラーも指摘するように、六葉を綴じ合わせた折丁が四、

そして八葉の折丁が一、合計五冊の折丁が確認できる<sup>(37)</sup>。それぞれの折丁のつなぎ目には明らかに不完全な詩は存在しないし、書記の手も変化していない。したがって、f.11r.~f.14v.は、十五世紀当時の構成を残していると考えられる。f.12b以降は、折丁を綴じ合わせた糸が見えないため、折丁の構成が確認できないと言われてきた。しかし、筆者は当該写本の実物を調査し、f.59v-f.60との間の綴じ糸を確認した。これにより、e.1写本のf.57からf.62は、六葉を綴じ合わせた折丁であることが判明した。また、f.60までは、詩・キャロルの内容が途切れることなく次のフォリオが続いていく。そのため、折丁が確認できない部分はお残るものの、e.1写本のキャロルは、作成当時から現在の順番で収められていた可能性が高い。あらかじめ作成されていた折丁に、書記が書き込んでいったものではないか。

結論としては、書記の手の変化とフォリオ・折丁の構成から、写本としてのまとまりは、後の時代に作られたものではなく、十五世紀のオリジナルであると考えられる。換言すれば、この写本は、それぞれ別々のフォリオに記録されたキャロルを、後の時代にまとめたものではなく、十五世紀の時点で既に現在の形に近いものであったということである。つまり、収められた詩・キャロルの順番も、十五世紀の順番を保っている可能性が高い。

## 第二節 来歴

e.1写本は、一八四七年に英文学者T・ライトによって初めて刊行された<sup>(39)</sup>。ライトは、当該写本中の詩・キャロルが、言葉や形式を若干変えて同時代の他の写本にも登場するという事実から、ミンストレルによって歌われていたキャロルを書記が書き取ったと考えた<sup>(40)</sup>。しかしライトはe.1写本の入手経路に関する情報は示さなかった。

F・マダン<sup>(41)</sup>は、ボードリアン図書館所蔵写本のカタログで、e.1写本のキャロル・詩は「おそらくミンストレルの使用のために収集された」と述べた。また、R・H・ロビンスは、e.1写本を、本稿第三章で取り上げる写本群のうちの二写

本と併せ「ミンストレル・コレクション」と呼び、歌い手が主人公として描かれたキャロルの存在が、これらの写本群に収められたキャロルがミンストレルによって歌われていた「内的証拠」であると論じた。<sup>(42)</sup>

これらの研究に対し、グリーンは、この写本がヨークシャーのベヴァリ (Beverley) 聖堂と関わりを持ってきたと推察した。<sup>(43)</sup> グリーンによると福音書記者聖ヨハネへの崇敬を示すキャロル・詩を三篇以上収める写本は他に現存しない。またグリーンは、この写本の方言はイングランド中東部 (East Midland) のもので、北部の方言も見られ、この地域には、福音書記者聖ヨハネに奉献された重要な宗教団体はベヴァリ聖堂以外にはない、と述べた。グリーンはさらに、聖トマス・ベケットへの崇敬を示すキャロルが線を引かれ、消されたことにも着目し、この事実は、宗教改革期にこの写本が宗教団体の手中にあつたことを裏付けると考えた。また、グリーンは、この写本に収められた様々な主題のキャロルの存在、特に修道院長へのラテン語の風刺詩の存在は、ベヴァリ聖堂における在俗参事会聖堂参事会員 (secular canon) たちの娯楽の雰囲気合う、と述べている。<sup>(44)</sup>

一方、一九九七年 J・I・フリーマンは W・フィッチという十九世紀の好古家 (antiquary) について研究、<sup>(45)</sup> その中で「写本についてグリーンとは異なる見解を示した。フリーマンは当該写本を、サフォク州イプスウィッチのものとしたのである。フィッチは、ライト以前の「写本の所有者で、一八四〇年代半ば、当該写本をライトに貸すか与えるかし、ライトはそれを刊行後、フィッチに返却したことが判明した。<sup>(46)</sup> ライトは当該写本について、後に、私信の中で「この写本はイプスウィッチの自治体の記録の中から出てきたが、偶然発見され、自治体の記録自体には関係がないと見なされ、取り除かれた」と書いた。<sup>(47)</sup> とはいえ、当該写本がイプスウィッチで発見されたことと、当該写本の十五世紀における所在とは別問題である。

ここで、「写本に關係付けられた場所と、作成目的を分類項として、先行研究を整理する。」<sup>(48)</sup> 写本の作成に関わりを持つ場所としては、(1) ヨークシャー、ベヴァリ、(2) サフォク州イプスウィッチが示された。(2) 説に関連するも

のとして、R・ビードルがノーフォークの方言についての研究の中で、<sup>(48)</sup>「写本をノーフォーク方言で書かれた写本の一例として挙げている。ノーフォークとサフォークは隣接しており、方言も似ているため、ビードルの説は(2)説を裏付けるといえよう。また、中世の言語地図においても、<sup>(49)</sup>「写本の書記Aの書写部分には、ノーフォークの方言が用いられているとされた。

中世の言語地図を確認すると、書記A・Bともに、イングランド中東部から北部にかけての広範囲で見られる方言を用いている。特筆すべき点としては、書記Aの書写部分の後半に、shallをxallと表記する、イングランド中東部に特徴的な語形が見られる。一方、イングランド北部にのみ見られる方言は、中世の言語地図で確認した限りでは存在しない。<sup>(50)</sup>したがって、イングランド中東部で教育を受けた人物により書写された可能性が高い。しかし、<sup>(51)</sup>「写本にはヨーク式連禱の順番に沿って聖人たちを賛美するキャロルが存在するため、書記がイングランド中東部で教育を受け、北部に移動した人物、あるいは北部から中東部へ移動した人物であった可能性がある。また、イングランド北部伝来の写本に収められていたキャロルを書写したため、ヨーク式連禱の影響を受けたキャロルを収めた可能性もある。

また、<sup>(52)</sup>「写本の作成目的に関しては、ミンストレルのレパトリーが、記録のために書き取られた、もしくはミンストレルの使用のために記録されたとする説と、在俗参事会聖堂参事会員の娯楽用に作成された、という二つの可能性が示されてきている。二説とも、写本中の、特定のキャロルの存在に注目しているが、<sup>(53)</sup>「写本が、十五世紀の段階でまとめられた写本であったことを考慮すれば、やはり写本全体の内容構成を重視すべきではないだろうか。したがって、本稿では、<sup>(54)</sup>「写本の内容構成を再検討し、当該写本がどのように形成されていったのか、という点を明らかにすることで、当該写本の作成目的について推察したい。

### 第三節 ㊦ 写本の内容

本節では、書き方の特徴と、収められた詩・キャロルの内容とを関連付けて分析することから、当該写本の作成過程を明らかにしたい（以降本節では表I参照）。まずNo. 1～3のキャロルでは、一篇のキャロルが頁途中で終わった場合、空白部を残し、次のキャロルは、次頁の最上部から始まる。次に、No. 4のキャロルは、フォリオ表（おもて）の上部で終わり、後ろに迷路のような図が挿入されている。しかし、No. 5のキャロルの後には、空白なしに、横線で区切ってNo. 6のキャロルが続けて書かれた。No. 6のキャロルの後には、また空白が残され、改頁が行われている。その後は、No. 52まで、改頁は行われず、キャロルは続けて書かれている<sup>(51)</sup>。このような書き方の変化を表Iに示した。空白部を残して改頁する書き方をa、空白部を残さずに線や印 (paraph) で各キャロルの境目を示す書き方をb、約一行分の空白により境目を示す書き方をcと記した。これらの書き方の変化を、詩・キャロルの順番で示すと、書記Aの書写部分は① 1～7（主としてa）、② 8～52（b）、③ 53～55（a）、④ 56～63（b）、書記Bの書写部分は⑤ 64（a）、⑥ 65～70（c）、⑦ 71～76（a）と大まかに区切ることができる。

①から⑦の区分と、詩・キャロルの内容とを照合すると、以下のようなになる。①の部分には、ラテン語のみで書かれた三篇が含まれる。その内一篇は、ラテン語で書かれた修道院長に対する風刺詩であり、聖職者同士で歌われたものと考えるのが自然である。

②の部分には写本の半数以上のキャロルが含まれる。ここにはラテン語のみで書かれた詩は存在せず、ラテン語の素養のない人々でも理解可能な、英語の、比較的平易なキャロルが多い。中世のキャロルに多く歌われた、クリスマスを祝うキャロルが多いのも特徴である。③の部分には、福音書記者聖ヨハネへ捧げた詩・キャロルが三篇まとめて収められてお

り、うち一篇はラテン詩である。④・⑤・⑥には、ラテン詩は一篇もなく、女性風刺、聖母マリア、死の恐怖、飲酒の楽しみなどを主題とするキャロルが収められている。⑦には、女性に関する英語キャロルが、六篇中四篇収められている。以上の分析から、①～⑦の部分は、それぞれ内容的にまとまりがある部分が多いと考えられる。

ここまでを整理すると、書記Aの書写部分では、ラテン詩を含む①・③に、aの書き方が適用されている一方で、英語キャロルのみを収めた②・④にはbの書き方が適用されている。書記Bの書写部分では、⑤でa、⑥ではcの書き方が適用されている。cの書き方は、空白部を最小限にとどめている点で、bの書き方と同類である。<sup>(52)</sup> 同じく書記Bの書写した⑦にはaの書き方が適用され、女性風刺が多く、一篇ずつが比較的長いという特徴がある。

したがって、少なくとも書記Aの書写部分に関しては、ラテン語キャロルを含む部分には、空白を残す書き方、英語キャロルのみの部分には空白を残さない書き方が、それぞれ適用されたということができる。聖職者向けに編まれた部分と、世俗の人々にも理解できる部分とが、書き分けられたのではないだろうか。また、書記A・Bともに、複数の書写方法を採用していることから、複数の、異なる写本群からキャロルを書写したと考えることができる。

本節をまとめると、<sup>(51)</sup>「写本の書記Aは、ラテン語を書写することのできる、聖職者であった可能性が高いが、書写の特徴と内容を関連付けて分析すると、聖職者向けの部分と、世俗向けにもなりうる部分とが、写本中に区別されて書写されたと考えられる。したがって、<sup>(52)</sup>「写本には複数の編集意図が存在したと解釈することが可能である。そのため、結果的に、<sup>(53)</sup>「写本のテキストは、全体として、広い階層の人々に親しまれうるものとなっていることを指摘しておきたい。

### 第三章 類似の写本群との比較

前章では、先行研究では見過ごされがちであった、<sup>(54)</sup>「写本における「書き方」と「内容」との関連性を指摘し、当該

写本に、複数の編集意図が存在したことを推察した。次の課題として、本章では、e1写本を、同時代の類似の写本群と比較することで、当該写本の位置付けを確認することとしたい。

e1写本に収められた詩・キャロルのうち三一篇が他の三四写本に、節数や言葉を変えて登場することが確認されている。それらの写本群のうち、キャロルをe1写本と共有する写本は、二五である<sup>(54)</sup>。二五写本群の内訳は、十四世紀の写本が一、十五世紀の写本は一六、十六世紀の写本は六、十六世紀の印刷本が一、年代不明一、となっている<sup>(55)</sup>。グリーンも指摘しているが、これほど多くの写本群とキャロルを共有する同時代の写本は他に現存していない<sup>(56)</sup>。この事実は、e1写本の書記が、当時広く親しまれていたキャロルを収集することを目的の一つとした可能性を示唆する。

本稿では、紙幅の都合により、前述の写本群全てについてe1写本と比較することは避け、十五世紀の写本に限定し、e1写本と複数のキャロルを共有する写本群を取り上げたい。それらは、作成年代順に示すと、大英図書館MS. Sloane 2593 (十五世紀前半。以後Sloane写本と略記)、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジMS. O. 3.58 (十五世紀前半。以後O.3.58写本と略記)、オックスフォード大学ボードリアン図書館MS. Arch Selden B. 26 (十五世紀半ば。以後Arch Selden写本と略記)、ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジMS.S.54 (十五世紀後半。以後S.54写本と略記)である<sup>(57)</sup>。これら四写本群に収められたキャロルは、もともと別々の写本にあったものが後世にまとめ直されたのではなく、十五世紀の時点ですべて収録されたと判断できるものである。したがって、これらの写本群をそれぞれ一まとまりのものとして、e1写本と比較することが可能である。これらの中で、Sloane写本はe1写本と共通のキャロルを八篇収め、十五世紀の写本群の中で最も多くのキャロルをe1写本と共有する<sup>(58)</sup>。その他の三写本は、それぞれ二篇ずつ、e1写本とキャロルを共有している。本章では、写本の体裁および構成内容、共有するキャロルのヴァージョンの二点を、写本どうしの類似性をはかる指標として取り上げる。それぞれの比較結果は、図にして示す(図1、2参照)。

## 第一節 写本の体裁および内容について

先述した四写本は、「ミンストレル・コレクション」と呼ばれたグループと、「多音声（ポリフォニー）楽譜付きキャロル写本」と呼ばれてきたグループに分類されている。本節では、便宜上この二グループに分けて、考察を加えたい。

### ① 「ミンストレル・コレクション」 Sloane写本・S.54写本

Sloane 写本は、十五世紀前半（一四二五～一四五〇年）に作成されたと言われ、七四篇の詩・キャロルからなる<sup>59</sup>。大きさは約十五センチ×約十二センチで、e.1写本と同様、小型写本である。三七葉の紙のフォリオからなり、HLr. 35v.は単一の書記により、キャロル・詩が書かれている<sup>60</sup>。

Sloane写本に収められたキャロル・詩のうち、ラテン語のみで書かれたのは二篇で、その他七二篇は英語、あるいは英語とラテン語の混合で書かれている。また、書記の用いた方言は、イングラント中東部のものと言われる<sup>61</sup>。内容構成の点では、Sloane写本には、世俗の人々を主人公にしたキャロルと、聖書に題材を得たキャロルが混在しており、e.1写本と類似している<sup>62</sup>。

e.1写本との相違点としては、Sloane写本中には、装飾および楽譜は全く存在しないことが挙げられよう。また、Sloane写本では、書記の字の大きさは、現存する全フォリオを通じてほぼ一定で、ほとんどのキャロルが、間に余白を作らず、つめて書かれている。つまり、Sloane写本は、単一の書記が、書写方法も字の大きさもほとんど変えることなく、作り上げた写本であると考えられる。

Sloane写本の来歴に関しては、グリーンが、聖ニコラウスへの崇敬を歌うキャロルを二篇収める写本が他には現存しないこと、聖エドマンズへの崇敬を歌うキャロルが一篇収められた、という二点を挙げ、この写本が、聖ニコラウスの祝日に少年司祭 (Boy bishop) の儀式を行っていたベリー・セント・エドマンズにあったベネディクト会修道院に所属した

のではないかと推察した。また、グリーンは、F.36にキャロルとは別の手で書かれた所有者の名前と思われる記述、Johannes Bardelに着目し、このバーデルという名はサフォーク州周辺に特徴的に見られるものであると指摘した。また、この人物が、ベリー・セント・エドマンズの修道士として他の写本 (Bodleian MS. Holkham Misc. 37, f.197) に登場する Johannis Berdwell と同一人物であるのではないかと述べた。<sup>63</sup> しかし、この人物の名前が記されたのは、キャロルを書いた書記とは異なる書記の手によるため、Johannes Bardelは、この写本の原所有者ではなかったと考えられる。

もう一つの「ミンストレル・コレクション」はS.54写本である。この写本は、十五世紀後半に作られ、二〇篇の英語キャロルと、その断片と思われるものからなっている。書記、所有者に関しては不明であるが、三人以上の手によると言われてきた。<sup>64</sup> 大きさは約十四センチ×約十二センチで、先の二写本と同様小型である。一四葉の紙のフォリオが革に包まれている。<sup>65</sup> この写本には、Sloane写本と同様、装飾や楽譜は存在しない。<sup>66</sup> 内容構成の点では、S.54写本には、キリスト降誕、聖母マリア賛美などの主題に加え、世俗の人間を主人公としたキャロルが三篇収められている。<sup>67</sup>

まとめると、e.1写本・Sloane写本・S.54写本は、史料の体裁、またおおまかな内容構成の点で、類似の写本群である。中でも、Sloane写本とe.1写本は、七〇篇以上のキャロルを収集したという共通点を持ち、より類似性が高いと考えられる。<sup>68</sup>

## ②多声音楽の楽譜つきキャロル写本 O.3.58写本・Arch Selden写本

多声音楽（ポリフォニー）の楽譜を収めた写本群は、イングランドでは十五世紀に登場した。ラテン語歌詞が付いた写本が大半を占めるが、その中で、英語キャロルを収めるものは四写本現存する。Bl. MS. Egerton 3307、Bl. Add. MS. 5615と、本節で取り上げる二写本である。四つの多声音楽の楽譜つきキャロル写本群はどれも、e.1写本とキャロルを共有するが、O.3.58写本とArch Selden写本は、二篇ずつe.1写本とキャロルを共有する。

O.3.58写本は、十五世紀前半（一四二五～一四五〇年）の写本で、単一の書記により、一二篇のキャロルが記された羊

皮紙の巻物(約二メートル四センチ×約十八センチ)<sup>(69)</sup>である。全てのキャロルに二部または三部合唱用の楽譜がついており、青や赤で大文字が飾られている。この写本では、キャロルの楽譜部分に沿って、バーデンと第一節の歌詞が書かれている。第二節以降の歌詞は、楽譜が書かれた後ろの余白に記されており、一篇のキャロルが書かれた部分の約四分の三を、楽譜部分が占めている。O.358写本の所有者・書記については不明である。内容には、ヘンリ五世のアジャンクールの戦いにおける勝利を祝うキャロルが含まれているが、主に降誕節の祝日に関する歌を収録し、クリスマス・キャロル集に近いものとなっている。

Arch Selden写本も、O.358写本と同様、多声音楽の楽譜を収めた写本である。これは五写本の集成で、そのうち一写本に、楽譜つきでキャロルとその他の詩が三一篇書かれており、キャロルは全て十五世紀半ばに書かれたという説が有力である。<sup>(70)</sup>九人か十人の手によって書かれたとされるが、楽譜部分と歌詞部分はそれぞれ同一人物の手による<sup>(71)</sup>と言われる。大きさは約二十六センチ×約十八センチであり、先に取り上げた「ミンストレル写本」群の約二倍の大きさである。

Arch Selden写本ではO.358写本と同様に、青や赤で大文字が彩られ、全てのキャロルに二部または三部合唱用の楽譜が付き、楽譜部分が一葉の約四分の三を占めている。内容をみると、世俗の事柄を描いたキャロルは全体の<sup>(72)</sup>一割で、その他は、クリスマスと聖母マリア賛美を主題とするキャロルである。<sup>(73)</sup>以上の、写本の体裁および内容構成において、Arch Selden写本とO.358写本は類似性が高いと言えるだろう。

まとめると、多声音楽の楽譜付き写本群は、キャロル集というより、むしろ楽譜集に近く、所有者あるいは使用者には、二部・三部合唱用の楽譜を読む能力が期待されていたと考えられる。以上の点で、単音の楽譜しか有さないe1写本や、楽譜を全く収めないSloane写本、SS4写本より、用途が限定されていたと推察される。

また、Arch Selden写本は、十五世紀にはウスター大聖堂付属修道院にあったと考えられてきている。写本中の一篇のキャロルに、バーデンが書き加えられ、同じ手で鶏のマーク (badge) が書かれている。これは、ロチェスター、ウスタ

1、イリーリーの司教を務めたジョン・オールコック (John Alcock) が使っていた鶏のマークであるという。オールコックがウスター司教であった間に、この写本を入手し、キャロルの一部を書き加えたと推測されている。<sup>(74)</sup> また、Arch Selden 写本には、所有者として、写本の書記とは別の手で、Chydeyと記されている。これは、十六世紀初頭、ウスター修道院の有力パトロンであったチャイルド家を指す可能性がある。つまりこの写本は、当初はウスター大聖堂内で用いられていたが、後に世俗の手に渡った可能性がある。<sup>(75)</sup>

以上、四写本との比較の結果は、図1のようになった。横軸を写本の体裁、縦軸を時間軸とした。「ミンストレル・コレクション」と呼ばれた三写本は写本の体裁・内容構成から、同一グループに入れることができる。楽譜付きの二写本は、全てのキャロルに楽譜がついているだけでなく、彩色も施され、より高価なものであったと考えられる。同様に、楽譜の存在から、これらの写本群は楽譜を「見て歌う」ために作成されたと考えられ、先に取り上げた「ミンストレル写本」群よりも、用途が明確であったと考えられる。

来歴については、Sloane写本、Arch Selden 写本の二写本のみ、十五世紀における所有者を推測する手がかりが写本中に残されていた。どちらの写本も、聖職者により所有されていたという説が示されている。Sloane写本とArch Selden 写本の来歴から類推すると、類似の写本であるe1写本もまた、十五世紀の段階では修道院や修道士によって保存されていた可能性が高いと考えられる。<sup>(76)</sup>

## 第二節 共有するキャロルの比較

前節では、写本の体裁、内容構成から、e1写本と、類似の写本群とを比較した。本節では、e1写本と先述の四写本群に共有されたキャロルのヴァージョン比較を行うことから、e1写本と先に挙げた四写本とが、どの程度類似しているか

を検討したい。

キャロルが複数の写本に残る場合、音の似た別の単語の使用、動詞の語尾・綴りの違いなど、ヴァージョンどうしに細かな差異が存在する。新しい節の付加、節どうしの入れ替え、節の削除などの作り変えも行われた<sup>(77)</sup>。このような、ヴァージョンごとの違いは、写本の作成目的を反映していると考えられる。書記は、他写本から、あるいは口述されたテキストからキャロルを書写する際に、それらを自らの出身地・居住地の方言に書き換えるのと同様、写本の作成目的に応じて内容を書き換えたと考えられるからである。したがって、ヴァージョン比較により導き出される相違点は、それぞれの写本群の作成目的に関わっていると考えられる。

本節では、紙幅の都合により、ヴァージョンどうしを逐語的に比較する方法を避け、それぞれのヴァージョンが持つ同じ内容の節を数えることにする<sup>(78)</sup>。同じ内容の節とは、動詞の形や語尾が異なる程度で、内容は作り変えられていないものを指す。

ここで、e1写本と同時代の写本群とが共有するキャロルには、世俗の人々を主人公にしたキャロルは一篇も存在しないことに留意しておきたい。したがって、本節では、聖書に題材を得たキャロルに限り、ヴァージョン比較を行うことが可能である<sup>(79)</sup>。

#### ① 「ミンストレル・コレクション」 Sloane 写本・S.54 写本

まず、e1写本とSloane 写本・S.54 写本が共有する唯一のキャロル「十二夜がやってくる」(表IでNo.43)について比較を行う。各ヴァージョンの持つ、同じ内容の節を数えると、e1写本とSloane 写本とは一一節、e1写本とS.54 写本とは一一節、Sloane 写本とS.54 写本は九節を共有する。

さらに詳しく相違点を見ると、このキャロルのe1写本・S.54 写本のヴァージョンは、「幼子イエスに会いに行く途中の三人の王たちが、ヘロデ王に会い、帰り道でも彼に会うと約束する。だが、キリストと聖母との会見後、天使に道を教え

られ、王たちは、ヘロデに会わずに国に帰る」という筋を共通して持つ。しかし、Sloane写本のヴァージョンには、前述の内容に加え、キリストのエジプト行き、ヘロデ王による幼子達の虐殺が描かれ、ラテン語バーデンが存在する。このように、Sloane写本のヴァージョンは、他ヴァージョンより多くを語るため、一七節からなり、e1写本・SS4写本のヴァージョンは、三節少ない一四節からなっている。

また、e1写本とSloane写本のヴァージョンには、どちらも第二節で「私はあなたに歌う／とても清らかな子ども」とを「私」語り手が登場する。また、最終節で、「全能の神に祈りを捧げよう」という呼びかけの言葉が出てくる。それに対し、SS4写本のヴァージョンには、それらのフレーズを含む節が欠落している。

次に、e1写本とSloane写本が共有する他の七篇のキャロルを見ていく。すべての節を共有するのは、降誕節の祝日を順に挙げて歌うキャロル一篇（表IでNo.19）である。その他、半数以上の節を共有するキャロルが四篇（No.13キリスト降誕・No.46聖母マリアの子守唄・No.33受難・No.41悔い改めよ）、残る二篇（No.16、No.26マリア賛美）は、冒頭から複数の節を共有している。また八篇中三篇は、Sloane写本のヴァージョンの方が長く、四篇は両者同じ長さである。e1写本のヴァージョンの方が長いのは一篇のみである。以上の事実から、e1写本のヴァージョンよりもSloane写本のヴァージョンの方が、多くのことを歌う、あるいは詳細に描く傾向があると言えるだろう。

最後に、e1写本とSS4写本とを比較するため、この二写本が共有するもう一篇のキャロル（表IでNo.59）を取り上げる。これは聖母マリアの五つの喜びを描いたものである。e1写本のヴァージョンは六節、SS4写本のヴァージョンは五節からなり、バーデンと第一～四節を共有している。このキャロルでは、SS4写本のヴァージョンには、e1写本のヴァージョンにある「神は、われらに喜びを下さった」というフレーズを含む節が欠如している。

まとめると、Sloane写本のヴァージョンは、他の二写本のヴァージョンに比べ、多くのことを語り、詳細にわたり描写する傾向にある。SS4写本とe1写本では、それぞれのキャロルの主題が絞り込まれたか、あるいは、簡略化されたと

考えられる。また、S54写本のヴァージョンでは、「これからあなた方に歌う」あるいは「皆で祈ろう」という聴衆への呼びかけが省略され、短くなる傾向が見られる。以上のことから、e1写本のヴァージョンは、内容を絞るか、あるいは簡略化しているにも関わらず、聴衆へ向かって呼びかけられる部分に関しては付加された、あるいは残されたという特徴を持つと考えられる。

## ②多声音楽の楽譜つきキャロル写本 O.3.58写本・Arch Selden写本

次に、多声音楽の楽譜付きキャロル写本群とe1写本の比較をするため、両者に共通して収められたキャロルをみていく。まず、e1写本と、O.3.58写本とが共有する二篇（表IでNo.53福音書記者聖ヨハネ・No.49キリスト降誕）を取り上げる。福音書記者聖ヨハネへの崇敬を歌うキャロルは、全ての節をe1写本と共有する。また、キリスト降誕を歌うキャロルは、全四節のうち、第一〜三節まで共有する。

次に、e1写本とArch Selden写本とが共有するキャロルのヴァージョンを比較する。この二写本が共有するのは「悔い改めよ、そして人を傷つけるな」（表IでNo.24）と歌うキャロル、キリスト降誕・公現を歌うキャロル（表IでNo.44）の二篇である。この二篇のキャロルのe1写本のヴァージョンは、全ての節を、Arch Selden写本のヴァージョンと共有し、バーデンのみ異なっている。

また、O.3.58写本、Arch Selden写本がそれぞれSloane写本と共有するキャロルをヴァージョン比較すると、Sloane写本のヴァージョンは、O.3.58写本・Arch Selden写本のヴァージョンより長く、詳細に歌う傾向があることが分かる<sup>(80)</sup>。そして、O.3.58写本とArch Selden写本は、S54写本とは一篇も共通のキャロルを持たない。

以上、共有するキャロルどうしの比較の結果は図2に示した。写本どうしを結ぶ線は、キャロルの共有を示す。まとめると、e1写本は、主題を絞り込んだ、あるいは内容を簡略化した点において、Sloane写本よりも、S54写本・O.3.58写本・Arch Selden写本の三写本群により近いといえる。また、S54写本以外の四写本群のキャロルには、聴衆

への呼びかけ部分が存在するという共通点が見られる。その点においては、e.1写本は、Sloane写本、O.3.58写本、Arch Selden写本に近いと言うことができる<sup>(81)</sup>。

この結果(図2参照)は、第一節で明らかになった、写本の体裁・内容構成の類似性(図1参照)と一致するものではない。e.1写本は、体裁・内容構成では、Sloane写本、S.54写本に類似しているが、共有されたキャロルのヴァージョンは、O.3.58写本、Arch Selden写本のものにより近いと考えられる。まとめると、e.1写本は、十五世紀の類似写本群の中において、主題を特に限定することなく数多くの英語キャロルを収集した写本であるという特徴をもつ。また、聖書に題材を得たキャロルについては、主題を絞り込む、あるいは簡略化する傾向がある一方で、聴衆へ呼びかける言葉を付加、あるいは残す傾向があると言えるのではないだろうか<sup>(82)</sup>。

### おわりに

以上、本稿では、e.1写本のテクストを、歴史学の史料として取り上げるための前提として、史料の体裁・構成内容を再検討し、十五世紀の類似の写本群との比較を行い、当該写本の位置付けを明確にすることを試みた。

結果として、第一に、e.1写本の書記がラテン語を解する人物であること、また類似の写本群の中に十五世紀における所有者が修道士・修道院であったものが複数あることから、e.1写本も、十五世紀においては、ミンストレルが所有していたというよりは、修道士や修道院のもとにあったと推測される。第二に、写本の大部分のキャロルについて言えば、聴衆として想定されていた人々は、聖職者に限定されてはいなかったと考えられる。写本全体の内容構成の再検討から、「書き方」と「書かれた内容」とに関連性があり、e.1写本には複数の編集意図が存在したと推察できるためである。

第三に、同時代の類似写本群との比較によって、e.1写本は、様々なテーマの英語キャロルを収集したという特徴を持

つことが分かった。また、聖書に題材を得た主題を歌うキャロルに関しては、主題を絞り込んだり、簡略化したりする一方で、聴衆へ呼びかける言葉を付加、あるいは残そうという意図が反映されていると考えられる。したがって、キャロルを収集しようとする意図を反映した写本群、実際に歌うために作成された写本群の両方の性質を併せ持った写本として、e1写本を再評価することができるのではないか。

以上のような特徴を有する当該写本に現れた、作成者の意図をより明確にするためには、収められたキャロルのテキスト分析が不可欠である。また、e1写本と同時代のキャロル写本群とが共有した詩には、世俗の人物を主人公としたものは一篇もなく、特に、女性風刺が共有されるのは、十六世紀の写本群のみである。今後、世俗の人々を題材にしたキャロルも含めて、e1写本のテキスト分析を行うことで、当該写本に現れた写本作成者の意図が、より明確に浮かび上がってくる事が期待される。それによって、e1写本中のキャロルの聴衆として想定されていた人々の、文化的背景を明らかにすることも可能になると考えられる。e1写本の特徴をより明確にするためのテキスト分析は、次稿に譲りたい。

#### 註

(1) ボードリアン図書館所蔵写本のカタログではMS. Eng. poet. e.1と表記される。Madan, F., Craster, H. H. I., and Denholm-Young, N., *A Summary Catalogue of Western Manuscripts in the Bodleian Library*, Oxford, 1895-1953, No.29734. (以後*A Summary Catalogue*と略記)。当該写本のff.11r-62vが、十五世紀に作成されたフォリオであり、本稿の分析対象である。ff.1r-10v, 63r-65vは十九世紀の製本段階で付けられた白紙であり、本稿の分析対象から除外した。fはフォリオ、rはフォリオ表、vはフォリオ裏の

略記)。当該写本の史料学的情報は以下の通り。Shelf mark: Oxford, Bodleian MS. Eng. poet. e.1. Contents: 76 Songs and Carols (mainly in English). Date: late 15<sup>th</sup> century. Material: Paper. Number of Leaves: 65folios. Dimension of a page: 121mm × 159mm. Pricking and Ruling: None. Collation: ff.1-10 and 63-65 are modern, ff.11-62 are original. ff.11-41: 1-4°, 5°, ff.41-56: Unable to determine the collation. ff.57-62: One quire of 6 folios. Catchwords: None. Quire marks: None. Punctuation: None. Decoration: Brackets were used to link rhymes.

f.13v. A diagram of a maze (black). f.40v, 41v, 50v. Musical Notations. Original Binding: Unknown. Second Folio: f.12r. Semper. (A *Summary Catalogue*, No.29734 にいくつかの情報を補足し作成。筆者が当該写本の実物を調査したところ、これまで存在が指摘されてこなかった watermark を複数確認した。watermark は当該写本の作成地と年代を推定する有力な手がかりとなると考えられる。この watermark については次稿で詳述したい)。なお、当該写本に収められたキャロル・詩の邦訳は存在しないため、本稿では当該写本中のキャロルを引用する場合、筆者の和訳を記した。「バーデン」は、キャロルの冒頭部、「一」「二」などは、節番号、／は改行をそれぞれ示す。

(2) 参考とした主な史料学的研究は以下の通り。Pearsall, D. ed., *Manuscripts and Readers in Fifteenth Century England: the Literary Implications of Manuscript Study*, Cambridge, 1983; Parkes, M. B., *English Cursive Book Hands 1250-1500*, Ilkley, 1979; 鶴島博和「*Textus Roffensis*の構成—古文書学的視点から」(『熊本大学教育学部紀要』四一号、一九九二年) 一一三八頁。

(3) ミンストレル minstrel は、吟遊詩人と訳されることが多いが、歌う者、踊る者、楽器を演奏する者、曲芸をする者なども、ミンストレルと呼ばれる。したがって、本稿では、それらを総称したものとして、片仮名でミンストレルと記すこととする。中世イングランドのミンストレルに

関しては、以下を参照。Southworth, J., *The English Medieval Minstrel*, Woodbridge, 1989; Stevens, J., *Music and Poetry in the Early Tudor Court*, London, 1961. 西洋中世の吟遊詩人・楽人については、以下を参照。樺山紘一「西洋中世の口誦者をめぐって—ヨーロッパ」(川田順造、野村純一編『口頭伝承の比較研究 四』弘文堂書店、一九八八年) 二二—三九頁。上尾信也『楽師論序説：中世後期のヨーロッパにおける職業音楽家の社会的地位』国際基督教大学比較文化研究会、一九九五年。

(4) Boffey, J. and Thompson, J., 'Anthologies and Miscellanies: Production and Choice of Texts', in Griffiths, J. and Pearsall, D., eds., *Book Production and Publication in Britain, 1375-1475*, Cambridge, 1989, pp.279-315, esp. p.279.

(5) 例えば、ケンブリッジ大学図書館 MS.Gg.4.27 はチヨーサーの詩の集成。大英図書館(以下BLと略記) MS. Harley 2255 と Cambridge, Jesus College, MS.56 はリドゲイトの詩の集成 (Boffey and Thompson, *op.cit.*, p. 303)。十五世紀に詩のみを集めた写本が作成されるようになったことについては、以下も参照。Woolf, R., *The English Religious Lyrics in the Middle Ages*, Oxford, 1968, p. 375.

(6) Greene, R.L., *The Early English Carols*, 2nd ed., Oxford, 1977, p.xxiii.

(7) Chaucer, G., *The Legend of Good Women*, ll.200, 201, in

Burgess, A. ed., *The Riverside Chaucer*, 3rd ed., Oxford, 1988, p. 594.

- (8) キャロルの主な意味として、*Oxford English Dictionary* には次のようにある。「一. リング・ダンス。歌に合わせて踊るダンス。(初出一三〇〇年。Cursor Mundi) 二. 歌。起源は、踊るための歌。現在では普通、喜ばしい調子の歌。(初出一三〇三年。Handlyng Synne) 三. 宗教的な歓びを歌った、歌または賛歌(初出一五四七年)」。*Oxford English Dictionary*, 2nd ed., Oxford, 1989, vol. 2, p. 907. 十五世紀には、歌を伴う踊りとしてのキャロルも依然として存在した。Tolkien, J. R. R. and Gordon, E. V., 2nd ed. revised by Davies, N., *Sir Gawain and the Green Knight*, Oxford, 1967, ll. 41-3, ll. 471-3, ll. 1025-6, ll. 1885-8.
- (9) オックスフォード大学ボールドリアン図書館MS. Douce 302 (Greene, *op. cit.*, p. xxxより引用)。
- (10) Greene, *op. cit.* この著作が、最も多くのキャロルを扱った研究であり、現在でもキャロルに関する研究はおおむね、グリーンンの著作に依拠している。
- (11) 以下を参照。Brown, C., *Religious Lyrics of the 15th Century*, Oxford, 1952, p. xix. ; Duncan, T., *Late Medieval English Lyrics and Carols, 1400-1530*, London, 2000, p. xxxiv; Woolf, *op. cit.*, p. 383.
- (12) e. 1 写本 f. 25v. 表Iでは、No. 27である。
- (13) このバーデンは、待降節に聖処女マリアへの祈りで交

唱 (Antiphon) として歌われたフレーズである。英語キャロルのリフレインに、ラテン語が使われることは頻繁にあった。教会でそのラテン語のフレーズを耳にしたことのある人々にとっては、ラテン語の素養がなくても、大意の理解が可能であったと推測される。

- (14) e. 1 写本 f. 34v. 表Iでは、No. 47である。
- (15) Duffy, E., *The Stripping of the Altars: Traditional Religion in England 1400-1580*, New Heaven and London, 1992, p. 15.
- (16) 原文では、'Citole, and sawtre' である。どちらも、リュートやギターに似た弦楽器。
- (17) French, W. H. and Hale, C. B., *Middle English Metrical Romances*, New York, 1930, pp. 880-1 (Greene, *op. cit.*, p. xxxixより引用)。
- (18) 原文は以下の通り。'Item for syngyng of carrolls on cristmas day / and to minstrels. 2s. 6d / 16d.' (Greene, *op. cit.*, p. xxxixより引用)。
- (19) Fegan, E. S. ed., *Journal of Prior William More*, Worcestershire Historical Society, London, 1914, pp. 367, 373, 385. (Greene, *op. cit.*, p. xlより引用)。
- (20) BL. Add. MS. 14997 (Greene, *op. cit.*, p. xxxiより引用)。
- (21) Brown, C., *Religious Lyrics of the 14th Century*, Oxford, 1970, p. xii.
- (22) Greene, *op. cit.*, p. 321.

- (23) 同会計記録によると、一五三七年にSir Markeと云ふ人物に「クリスマス用キャロルのため」として三ポンド四シリング支払っている。Littlehales, H., ed., *The Medieval Records of a London City Church (St. Mary at Hill) A.D. 1420-1559*, Early English Text Society (以後E.E.T.S.と略記), Original Series, Nos. 125, 128, London, 1904-5, pp. 54, 378.
- (24) 以下を参照。Robbins, R.H., 'Middle English Carols as Processional Hymns', *Studies in Philology* 56 (1959), pp.559-582.
- (25) Greene, *op.cit.*, pp.cvii-cvix.
- (26) Whiting, E. K. ed., *The Poems of John Audelay*, E.E.T.S. Original Series, No. 184, London, 1931, pp.vii-xi; Taylor, A., 'The Myth of the Minstrel Manuscript', *Speculum* 66 (1991), pp. 43-73, esp.p.65; Greene, *op.cit.*, p.317.
- (27) この写本は、ミンストレルと、聖職者とが、中世後期イングランドにおいて、必ずしも異なるカテゴリーに分類されるものではなく、相互に関わりをもっていたことを示す例となっている。
- (28) オックスフォード大学ベイリオル・カレッジ MS. 354. この写本には同時代の手で、目次が作られ、キャロルが分類されている。Dyboski, R., ed., *Songs, Carols, and Other Miscellaneous Poems*, E.E.T.S., Extra Series, No.101, London, 1907.
- (29) Reed, E., *Christmas Carols Printed in the Sixteenth Century: Including Kele's Christmas Carolles Newly Inprynted, Reproduced in Facsimile from the Copy in the Huntington Library*, Cambridge, 1932.
- (30) e.1写本は、現在、赤いベルベットを貼りつけた箱の中に収められている。この箱は、十九世紀のものである。A Summary Catalogue, No.29734.
- (31) A Summary Catalogue, No.29734. 誤って二七と番号を振られたフォリオが二葉ある。
- (32) 韻を線で結ぶ慣行は、作成当時からあったことが、同時代の裁判記録に残った詩の写しから分かる。駒澤大学北野かほる先生のご教示による。感謝申し上げる。なお、韻を結ぶ線は、No.1からNo.5のキャロルまで赤で色付けされている。
- (33) e.1写本にある楽譜については、以下を参照。Dufay, G. and Stainer, J., *Early Bodleian Music*, vol.2, London, 1898, pp.182-4. この論考によれば、e.1写本における福音書記者聖ヨハネに捧げたラテン詩(表IでNo.55)の楽譜の、「主な音調と簡潔な言い回しは、同時代の他のメロデーとはきわめて距離を置く性格」、受胎告知を歌うキャロル(No.65)の楽譜は、「教会で使われる音楽様式」である。もう一篇のキャロルに付された楽譜(No. 64のキャロルのバーデン部分)は、この論考では扱われていない。
- (34) 表IでNo. 60、61。

- (35) *A Summary Catalogue*, No.29734.
- (36) Greene, *op.cit.*, p.317; Taylor, *op.cit.*, p.63. テイラーは当初、書記Aは最初の三葉半のフオリオを書き、残りは全てBによるとした。しかし、二〇〇三年現在、グリーン説を支持する見解を持っていることを、テイラーは筆者に対し明らかにした。
- (37) ff.11-16, ff.17-22, ff.23-28 (27と番号を付されたフオリオ二葉を含む), ff.28-33がそれぞれ六葉を綴じ合わせた折丁、ff.34-41が、八葉からなる折丁。Taylor, *op.cit.*, p.65.
- (38) f. 33とf. 34の間以外では、キャロルの内容が途切れることなく各折丁に続いている。
- (39) 刊行される前、J・ハンターによってこの写本の写しが作られ、現在、BL. MS. Add. 25478となっている。刊行史料は以下の通り。Wright, T., ed., *Songs and Carols Now First Printed from a Manuscript of the Fifteenth Century*, Percy Society, London, 1847.
- (40) *Ibid.*, p.vii.
- (41) *A Summary Catalogue*, No.29734.
- (42) Robbins, R. H., 'The earliest carols and the Franciscans', *Modern Language Notes* 53 (1938), pp. 239-245; Robbins, R. H. ed., *Secular Lyrics of the 14th and 15th centuries*, Oxford, 1955, p.xxvi. ロビンスが根拠に挙げたキャロルは、e.1写本では、「独身で、旅をしている男が、人々の集う場で歌い、バグパイプを吹き、乙女たちに好ま

れる」という内容のキャロルである (表IではNo.22)。

- (43) Greene, *op.cit.*, p.316.
- (44) Greene, *op.cit.*, p.316. グリーン説は、以下の研究で支持されている。Boffey, J., *Manuscripts of English Courtly Love Lyrics in Late Middle Ages*, *Manuscript Studies* 1, Cambridge, 1985, p.26; Taylor, *op.cit.*, p.64.
- (45) Freeman, J. I., *The Postmaster of Ipswich; William Stevenson Fitch: Antiquary and Thief*, London, 1997, pp.99-102.
- (46) *Ibid.*, p.100.
- (47) フリーマンによると、フィッチに返却された後のe.1写本の来歴は以下の通り。一八五四年末に、フィッチがJ・O・ホリウエルに売却、ホリウエルは一八五五年のクリステイアのオークションに出品、その後、T・コーサー、リヴァプールの収集家J・メイヤーの手に渡り、一八八七年、ボードリアン図書館によって買い取られ、現在に至る。Freeman, *op.cit.*, p.100; *A Summary Catalogue*, No.29734. フィッチが、ライトに、出版される本で自分の名前、写本の入手経路に触れないように頼んだこと、フィッチの死後、一八六四年にライトがイプスウィッチを訪れ、e.1写本について語ったことについては、以下参照。Journal of the *British Archaeological Association*, vol.xxi (1865), p.175. [Denney, A.H., 'William Stevenson Fitch, 1792-1859', *The Proceedings of Suffolk Institute of Archaeology*, XXVIII Part 2

(1958), pp. 109-135に引用。

- (48) Beadle, R., 'Prolegomena to a Literary Geography of Later Medieval Norfolk', in Riddy, F. ed., *Regionalism in Late Medieval Manuscript and Text: Essays Celebrating the Publication of A Linguistic Atlas of Late Medieval English*, Cambridge, 1991, pp.89-107, esp. p. 93.
- (49) MacIntosh, A., *A Linguistic Atlas for Late Medieval English*, 4 vols., Aberdeen, 1986, esp. vol.1, p.148. 以下A *Linguistic Atlas*と略記。この中世の言語地図においては、写本の書記Bについては分析されていない。
- (50) グリーンが挙げた、ヨークシャー方言の具体例は、猪の頭のキャロルに出てくる 'Po, po, po, po' というフレーズである。これは、グリーンによれば、ヨークシャーで書かれた十六世紀の劇に出てくる、豚を追う際の掛け声と同一であるという。詳細は以下を参照。Greene, *op.cit.*, p.381. 中世の言語地図では、このフレーズについては取り上げられていない。
- (51) このような書き方の変化については、先行研究においては、特に写本の前半部分に関してテイラーが指摘し、書記の交代に伴うものと解釈した。しかし、先述のように二〇〇三年現在、テイラーは、書記は、この場所では交代していないという見解を示している。注36参照。
- (52) 書記Bは、当初空白部を残して改行する方法で書いたが、No.65から、各キャロルの境目には、約一行分の空白の

みを残すようになったと考えられる。

- (53) さらに、キャロルに描かれた内容を見ると、基本的には二〜四篇ずつ似通ったテーマが並んでいることが多い。たとえばNo.3、4はどちらも風刺、No.19、20はクリスマスソングである。また、No.21「妻に尻に敷かれてる男の嘆き」とNo.22「独身の、旅行く男の歌」が並んでいるのは、二篇のキャロルを対比させる意図があつたかのようである。また、福音書記者聖ヨハネを歌った三篇はまとまっている。以上のことから、一回に数篇単位で収集、あるいは書写されたのではないかと考えられる。
- (54) 残り九写本はどれもNo.63のキャロルの第一節のみを祈りの言葉として収めているものである。表I参照。
- (55) 各写本の名称は、表I参照。十五世紀に作成されたと言われる写本群のうち、後世の寄せ集めではなく、作成当時の形を残す写本で、初期の所有者について推定されてきた写本群は、本稿で取り上げる写本以外に、以下のものがある。ケンブリッジ大学図書館 MS.Ee.1.12. ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ MS. O.9.38. イェール大学図書館 MS. 365 の三写本である。ケンブリッジ大学図書館 MS.Ee.1.12 はフランシスコ会修道士ジェイムス・ライマンが作成・収集したキャロルを収めた写本(本稿一章二節参照)。ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ MS. O.9.38 は、グラストンベリー修道院の修道院長の手紙の写し(十五世紀半ば)を含み、同修道院との関連が有力視されてき

た。Greene, *op. cit.*, p.328. イェール大学図書館MS. 365は、十五世紀のコモンプレイス・ブックで、十六世紀初頭の所有者は、サフォーク州のロバート・メルトンという名の富裕なヨーマンであった。イェール大学図書館MS. 365については、以下を参照。Smith, L. T., *A Common-place Book of the Fifteenth Century*, London, 1886; Davies, N., *Non-Cycle Plays and Fragments*, E.E.T.S., Supplementary Series 1, London and New York, 1970, pp.lviii-lxiii; Duffy, *op. cit.*, pp.74,75; Greene, *op. cit.*, pp.334,335; Boffey and Thompson, *op. cit.*, p.293.

(56) Greene, *op. cit.*, p. 318.

(57) Sloane写本、O.358写本は、どちらも一四二五〜五〇年が作成年代とされるが、e1写本と類似していると言われてきたSloane写本から分析を始めるため、Sloane写本を先に示した。なお、これら四写本群のうち、Sloane写本については、ファクシミリを確認した。S54写本については、刊行史料を参考にした。この写本についても、今後、一次史料あるいはファクシミリを確認する予定である。

(58) 最も多くのキャロルをe1写本と共有するのはオックスフォード大学ベイリオル・カレッジ写本MS.354（本稿一章二節参照）であるが、これは十六世紀に作成された写本である。キャロルの発展を知るためには両者の比較が有効であるが、本稿では同時代の類似写本群との比較から、

この写本の書記・所有者について考察するため、オックスフォード大学ベイリオル・カレッジ写本MS.354は取り上げない。

(59) Sloane写本も、T・ライトによって最初に刊行された。Wright, T. ed., *Songs and Carols from a Manuscript in the British Museum of the Fifteenth century*, London, 1856. Sloane写本は、より大きな写本の一部が残ったものであると考えられる。この写本には、二度頁付けをした跡があり、現在の頁番号の前に、横線を引いて消された頁番号が存在する。その消去された頁番号のうち、冒頭の四七頁分のフオリオが現存しないことから、少なくともその部分は、失われたと考えられる。また、この写本の、現存する第一葉に書かれたキャロルは、冒頭部が欠落していると言われる。

(60) F35v, F36, F37には、それぞれ異なる三人の書記により、メモが書かれているが、グリーンによれば、全て十五世紀の筆跡である。

(61) MacIntosh, *A Linguistic Atlas*, vol.1, p. 116. また、Sloane写本に収められた一篇のキャロルにノーフォークの地名が出てくることから、その近辺で作成されたと考えられている。

(62) たとえばロビンという名の男が従者とともに戦う、七六行からなるバラッド、世俗領主に仕える男が「奉仕しても報われない」と歌うキャロルなどがあり、写本中の約三割が、世俗の人々を主人公に描いている。Wright,

*Songs and Carols from a Manuscript in the British Museum of the Fifteenth Century.*

- (63) Greene, *op. cit.*, p. 306.
- (64) MacIntosh, *A Linguistic Atlas*, vol. 1, p.64; Greene, *op. cit.*, p.326. 全ての書記が、イングランド中東部の方言を用いているとされた。
- (65) Greene, *op. cit.*, p.326; Taylor, *op. cit.*, p.64.
- (66) 一六葉の内二葉が失われたと言われる。この写本は持ち運びやすい一方、高価なものではなかったと考えられている。Taylor, *op. cit.*, p.64.
- (67) 女性を鉄や針などにたとえる風刺詩、向こう見ずのジャック (Jack Reckless) という人物を語り手としたキャロル、恋愛を主題とするキャロルが含まれる。刊行史料として以下を参照。James, M. R. and Macaulay, G. C., 'Fifteenth Century Carols and Other Pieces', *Modern Language Review* 8 (1913), pp.68-87.
- (68) e1写本に特徴的なものとしては、Sloane写本、S.54写本と比べると、先に述べた楽譜の存在の他に、女性風刺を数多く収めているということが挙げられよう。
- (69) 現存するキャロル写本群の中で、巻物に書かれた唯一の例である。巻物の裏面には後の時代の手でラテン語のミサ曲 (聖三位一体、コーパス・クリステイ) が書かれている。この写本の方言は、中世の言語地図によると、イングランド中東部のものである。MacIntosh, *A Linguistic Atlas*,

vol.1, p.65. この写本のキャロル・楽譜は、F・メイトランドにより刊行された。Maitland, J.A.F., ed., *English Carols of the Fifteenth Century from a MS. Roll in the Library of Trinity College, Cambridge*, London, 1891.

- (71) Padelford, F., 'English Songs in the MS. Selden B.26; Anglia xxxvii(1912), pp.79-115, esp. p.80; Greene, *op. cit.*, p.314.

この写本が九人か十人の手によるのは、何人もの書記が、書き継いで作成したためかもしれない。注74参照。

- (72) O.358写本と共有されるアジャンクール・キャロル、鋤 (plough) で早く耕そうと呼びかけるキャロルが収められている。後者については、プラウ・マンデー (Plough Monday) に、聖堂付きの聖歌隊によって歌われたとグリーンが推察している。Greene, *op. cit.*, p.315.

- (73) Padelford, *op. cit.*, pp.86-115.

(74) グリーンは、この写本中のキャロルは、ウスター大聖堂付属の聖歌隊によって、祝日の、典礼後に歌われたと推測した。また、先述のウスター大聖堂の会計記録に、一五一年「クリスマスの日、キャロルの歌い手たちに、一六シリング」、「キャロルを書いた書記リチャードに、六シリング八ペンス」支払った旨記されている。グリーンも指摘するように、外部からの訪問者の歌ったキャロルが、写本に書き加えられていった事実があったと考えられる。Arch Selden写本も、このような過程を経て書き留められ

たものであるため、多くの書記の手が確認されるのかもしれない。グリーンへの指摘については以下を参照。Greene, *op. cit.*, p.315. また、イングラントの例ではないが、中世末期における聖歌隊の構成員については、以下を参照。山本成生「カンブレー大聖堂の聖歌隊―中世末期の「音楽家」のありかたに関する一考察―」(『史学雑誌』一二二―一二三号、二〇〇三年) 五六―七九頁。

(75) Greene, *op. cit.*, p.315.

(76) 後の時代には、Arch Selden写本のように、世俗の手へと受け継がれた可能性もある。しかし世俗の人々が所有した写本群では、空白部分に何らかのメモや手紙の写しなどが記入される場合が多いのに対し、e1写本には空白部がそのまま残されていることには留意する必要がある。

(77) Greene, *op. cit.*, p.cxxxix.

(78) e1写本に収められたキャロルのヴァージョン比較を行った論考として、以下を参照。Utley, F.L., 'When Nettles in Winter Brings Forth Roses Red', *Publications of the Modern Language Association of America* 60 (1945), pp.346-355.この論考は、e1写本のNo.58の女性風刺キャロルを、他写本群のヴァージョンと比較するもので、その際、どの節をどのヴァージョンと共有するかということを重視している。

(79) ヴァージョン比較にあたり、以下の刊行史料を参照した。Wright, *Songs and Carols from a Manuscript in the*

*British Museum of the Fifteenth Century*; James and Macaulay, *op. cit.*, pp. 68-87; Padelford, *op. cit.*, pp.79-115; Maitland, *op. cit.*, pp. 2-62.

(80) Sloane写本とArch Selden写本、Sloane写本とS54写本にも、共有されたキャロルはそれぞれ二篇あり、その全てにおいてSloane写本のヴァージョンの方が長くなっている。

(81) 十五世紀においては、体裁や構成内容の異なる写本であっても、地域差がないテーマであれば、同じような詩・キャロルが収められたと推察することも可能である。また、頻繁に描かれた、聖母マリア賛美やキリスト降誕については、ヴァージョンどうしがかなり異なるため、それらのキャロル・テキストの詳しい分析から、当該写本の作成者の意図を、読み取ることが可能であると考えられる。

(82) この点では、e1写本は、Sloane写本やS54写本に比べ、実際に歌うために用いられた可能性の高いArch Selden写本、O3.58写本により類似していると判断を示し、聴衆を意識した写本に近い、と解釈することができ

る。  
(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程)

## 表 I e.1写本の内容

## 表の見方

- 1 紙幅の都合により、e.1写本に収められたキャロル・詩の第一行目の引用は行わず、それぞれの主な内容を示した。
- 2 書き方の特徴を次のように略記した。a: 頁の最上部から書き始める。直前のキャロルとの間には空白部が残され、改頁されている。b: キャロルの境目には空白を残さず、横線あるいは印 (paraph) を書いて区切る。改頁は行わない。c: キャロルの境目には一行分程度の空白を設ける。改頁は行わない。
- 3 27と番号を付けられたフォリオが2葉ある。folioの欄で、27'は、27と番号を付けられた2葉目のフォリオを指す。
- 4 略記した写本群は次の5写本。[1]BL. MS. Sloane2593, [2] Cambridge, Trinity College, MS. O. 3. 58, [3]Oxford, Bodleian Library, MS. Arch. Selden B.26, [4]Cambridge, St. John's College, MS. S54, [5]Oxford, Balliol College, MS. 354
- 5 No.63のキャロルの第1節が以下の9写本に存在。以下の写本群中では、祈りの文句であり、キャロルではない。Oxford, Bodleian Library, MS.Douce 54; Oxford, Bodleian Library, MS. Rawlinson C.48; Oxford, New College, MS. 310; Oxford, Bodleian Library, MS. Gough Liturg.7; BL. MS. Arundel 285; BL. MS. Harley 2851; BL. Add. MS. 27924; 'Billyngs' MS.; Cambridge, Trinity College, MS. O.9.38

No.	folio	書記	書き方	内容	同じキャロルを収める他写本
1	11r-11v	A	a	受胎告知(ラテン語)	
2	12r-12v	A	a	修道院長への風刺詩(ラテン語)	
3	13r	A	a	遺言執行人への風刺詩	
4	13r-13v	A	b	狡賢いもの3つ、狐、修道士、女。怒るもの3つ、鼯、蜂、女。	
(図)	13v	不明	-	迷路のような図。着色なし。	
5	14r	A	a	受胎告知、キリスト降誕(ラテン語)	
6	14r-15v	A	b	不運を嘆く男:運命の女神にみはなされた。	
7	16r	A	a	キリスト降誕	
8	16r-16v	A	b	何事も変わりやすく信じられないが、神のみが我らに安らぎを与える。	

9	16v-17v	A	b	信じられる友人はまれである。	
10	17v-18v	A	b	聖母マリアの子守唄	[5]; National Libr. of Scotland, MS. Advocates 19.3.1; BL. MS. Royal Appendix 58
11	18v-19v	A	b	処女懐胎、キリスト降誕、キリスト公現	
12	19v	A	b	受胎告知、キリスト降誕、キリスト公現	
13	20r	A	b	キリスト降誕	[1]; Bodleian Libr. MS. Ashmole189
14	20r-21r	A	b	聖母マリアの子守唄: 嬰兒キリストが、自らの受難を予言する。	Cambridge Uni. Add. MS. 5943; BL. Add. MS. 5666
15	21r	A	b	キリスト降誕	
16	21r-21v	A	b	聖母マリアの5つの歎び(受胎告知、キリスト降誕、公現、復活、最後の審判)	[1]; [5]
17	21v	A	b	ほとんど盲目の男への治療法: 一日中風に向かわせ、煙の中におきなさい。	
18	22r	A	b	舌に気をつけろ。心に何があろうと、言うことに気をつけなさい。	
19	22r-22v	A	b	降誕節の祝日	[1]
20	22v-23r	A	b	Boar's Head Carol(猪の頭のキャロル): 森で猪と戦い、新年の祝いのために、その頭を持ってきた。	
21	23r-23v	A	b	妻に虐げられている夫の独白	
22	23v	A	b	独身で、旅をしている男の歌: 彼はどこに行っても、乙女たちに愛される。彼は歌い、バグパイプを吹く。	
23	23v-24r	A	b	鳥が歌う。信じられる友人はまれである。	[5]
24	24r-24v	A	b	悔い改めよ、そして人を傷つけるな。	[3]; BL. Add. MS. 5565; BL. MS. Egerton 3307
25	24v-25r	A	b	三位一体、天地創造、聖餐の奇跡などを疑問視することは間違いである。	

26	25r-25v	A	b	聖母マリア賛美、マリアの共苦、マリアの名前賛美	[1]
27	25v	A	b	聖母マリア賛美	
28	26r	A	b	受胎告知	[5]
29	26r-26v	A	b	人生のあらゆる場面で、目を開けてしっかり見なさい。	
30	26v-27r	A	b	どんな場合(人)でもお金は必要。	
31	27r-27v	A	b	受胎告知	[5]; Hunterian MS.83
32	27r	A	b	神に感謝しよう。	
33	27r-27v	A	b	キリスト受難(聖母マリアと、十字架上のキリストとの会話)	[1];[5]; Huntington Libr., <i>Christmas caroles neweley Inprynted</i> ; BL. Add. MS. 31042; National Libr. of Scotland, MS. Advocates 18.7.21
34	27v-28r	A	b	キリスト降誕	
35	28r-28v	A	b	いつでも信心深くあれ。	
36	28v-29r	A	b	悪い舌を持つ男は、どこでも、悪いことを言う。	
37	29r-29v	A	b	キリスト降誕、受難	
38	29v	A	b	猪の頭のキャロル:この集まりの最初は、あなたは猪の頭を嫌うかもしれない。歌いなさい、そうしないのなら去りなさい。	
39	29v-30r	A	b	妻に罾にかけられ、その罾から抜けられない男。	
40	30r-30v	A	b	Holly and Ivy Carol:擬人化されたひいらぎとつたが、どちらがより偉大か言い争う。	
41	30v-31r	A	b	どのような場合でも悔い改めよ。	[1]
42	31r	A	b	受胎告知、キリスト降誕、受難、復活	
43	31v-32v	A	b	キリスト公現:3人の王が幼子キリストに会いに行く途中、ヘロデに会うが、帰り道は違う道を通った。	[1]; [4]; BL.MS. Harley 541
44	32v-33r	A	b	キリスト降誕、公現	[3]; BL. Add. MS. 5665

45	33r-33v	A	b	聖母マリア賛美	
46	34r-34v	A	b	聖母マリアの子守唄	[1]
47	34v	A	b	夫婦の争い: 年老いた男のひげを、妻がつかみ、夫は涙を流す。	
48	34v-35v	A, B	b	カンタベリーの聖トマス	BL. Add. MS. 25478
49	35v	A	b	キリスト降誕	[2]; [5]; Cambridge Uni. MS. Ee 1.12
50	35v-38r	A	b	ワイン賛美	[5]
51	38r-38v	A	b	聖母マリアお潔めの祝日	
52	38v-39r	A	b	いつでも、死の恐怖が私を悩ませる。	[5]; Huntington Libr., <i>Christmas caroles neweley Inprynted</i>
53	39v	A	a	福音書記者聖ヨハネ	[2];[5]; BL. Harley 4294; BL. Add. MS. 5665
54	40r	A	a	福音書記者聖ヨハネ	
55	40v-41r	A	a	福音書記者聖ヨハネ(ラテン語。楽譜付き)。	
(楽譜)	41v	A	b	No.65用楽譜	
56	41v-42r	A, B	b	肉、卵、バターなど、何もいらぬ。エールをもってこい。	BL. MS. Harley 541
57	42v-43v	A	b	女性風刺: 妻が夫より優位に立っている家がある。	
58	43v-45r	A	b	女性風刺: いらくさが冬に薔薇を咲かせるような、不可能な事が起こった時、初めて女を信用できる(女はそれほど信用できない)。	[5]; BL. MS. IB55242
59	45r-45v	A	b	聖母マリアの5つの歓び: 受胎告知、キリスト降誕、受難、復活、最後の審判	[4];[5]
60	45v-47v	A	b	キリスト降誕(And I were a mayd, etc. という歌のメロディで歌う、という覚書きあり): 降誕、キリストの行った奇跡、受難。	

61	47v-48r	A	b	キリスト降誕(Now must I syng, etc.という歌のメロディで歌う、という覚書きあり)	
62	48r-49r	A	b	いつでも、死の恐怖が私を悩ませる。	
63	49r-50v	A	b	連祷:キリスト、聖母マリア、天使、聖人への祈り	表の見方 5 参照。
64	50v-51r	B	a	どこに行っても、悪い舌(を持つ人)は、悪口を言う(パーデンのみ楽譜付)。	
65	51v-52r	B	c	受胎告知	[5]; Yale Univ. Libr. MS.365
66	52r-53v	B	c	エール(酒)に気をつける:エールは人を、道端で眠らせたり、争いのもとになったり、妻を殴らせたりする。	
67	52v-53r	B	c	キリスト降誕	
68	53r-53v	B	c	キリスト降誕	
69	53v-54r	B	c	ひいらぎ賛美	
70	54r	B	c	つた賛美	
71	54v-55r	B	a	女性風刺:夫を持つ女たちの狡猾さ。	[5]
72	55v-56r	B	a	女性賛美(風刺に使われた可能性あり):女性は決して裏切らず、慎み深く、お酒も飲まない。	[5]
73	56v-57r	B	a	女性風刺:慎み深く、賢い女たちもいるが、狡賢く、野蛮で、愚かな女たちもいる。	[5]; Lambeth Palace MS. 306
74	57v-59v	B	a	友との集い(女が語る、仲間と飲む楽しみ):女たちが道で出会い、居酒屋でワインを飲む。	[5]; BL. MS. Cotton Titus A, BL. MS. Cotton Vitellius D
75	60r	B	a	羊飼いたちがバグパイプを吹いていると、天使たちが現れ神の子の降誕を告げる。	[5]; (トマス・シャープ所有の写本、1879年焼失)
76	60v-61r	B	a	社会風刺:悪がはびこり、美德が損なわれている。	[5]

図1 写本の体裁の比較

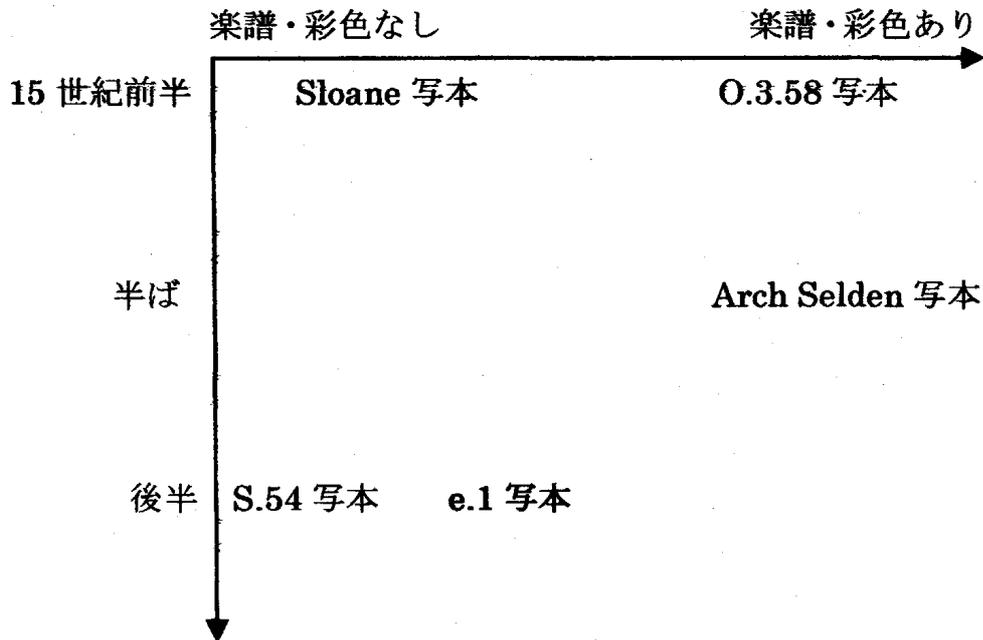


図2 キャロルのヴァージョンどうしの比較

写本どうしを結ぶ線は詩の共有を示す。

